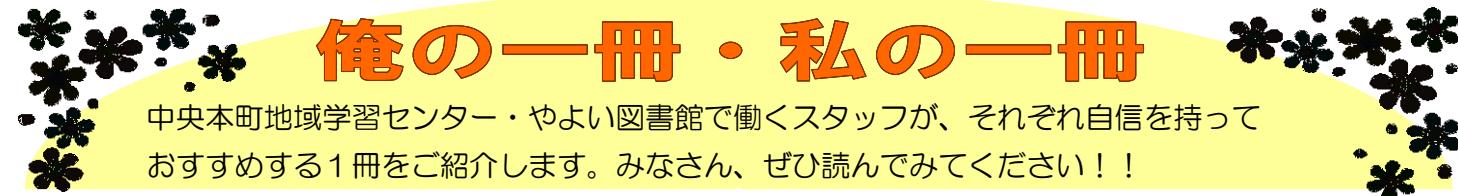




いつもやよい図書館をご利用いただきましてありがとうございます。

秋も深まってきた。読書の秋に合わせるように、やよい図書館のマスコットキャラクターがみなさんの投票によって決定しました！その名も「にやよい」です。（14ページをご覧ください）頭の本型の帽子とほっぺが赤くてとてもかわいいですね。応募してくださったみなさま、投票にご協力いただいたみなさま、本当にありがとうございました！これからは「にやよい」と仲よくしてくださいね。また、9日（土）と10日（日）のふれあいまつりでは、図書館からとらばーゆの本を2階フリースペースにお出しします。お一人2冊までお持ち帰りいただけますのでぜひご覧ください。今月も楽しい図書館をご利用ください。



中央本町地域学習センター・やよい図書館で働くスタッフが、それぞれ自信を持っておすすめする1冊をご紹介します。みなさん、ぜひ読んでみてください！！

館長の一冊

『頭の打ちどころが悪かった熊の話』『まるまれアルマジロ！』 安東みきえ/著 理論社

2冊とも動物の短いお話が入っているとても愉快な本です。簡潔な文でリズミカルにお話が進むのですが、時にふか~い表現もちりばめられていて、大人も子どもも楽しめる内容になっています。カコの実を食べたことで、子どものへびの抜け殻だけをかわいがるようになってしまったお父さんや、食べてしまったキツネがおなかの中で泣いているとメリメソするトラ、太古からの死んだ生物たちがその歴史をささやく土の中で暮らすケラの親子など、思いもつかない生活を営む動物たちがたくさん登場します。ゆっくり読むとなんだか元気が出できます。

俺の一冊（山越）

『星を継ぐもの』 ジェイムズ・P・ホーガン/著 創元SF文庫

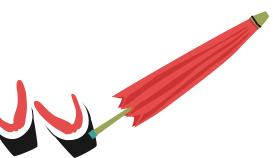
宇宙開発の進んだ近未来の地球。月で5万年前に亡くなった、人類によく似た遺体「チャーリー」が発見されます。チャーリーの身元の解明から端を発した、5万年前の月、異星人の宇宙船、生物の種の起源等の謎に対して、技術的ブレークスルーも様々な調査、ひらめきから手掛けかりを得て立ち向かう様は、人類vs宇宙の推理小説のようにも見えます。SFということでややこしい単語がたくさん出でますが、「すごい！ 便利！」程度に捉え、近未来の生活やチャーリーが置かれていた、死と隣り合わせの残酷に思える宇宙の様子を想像してみてはいかがでしょうか。

私の一冊（青木）

『大地の子』 山崎豊子/著 文藝春秋

つい先日、山崎豊子さんが亡くなりました。彼女の小説は、ドラマ化や映画化されたものが多いですが、私の一冊は『大地の子』です。戦争による残留孤児の主人公が、中国（満州）で厳しい環境の中を生き延び、日中合同の製鉄所建設に関わり、父との再会を果たし、その絆を深めていく物語です。幾多の困難を乗り越えて行くその不屈の精神力に感動しますが、読んでいく者にも忍耐と精神力が求められます。山崎豊子さんに哀悼の意を表しつつ、秋の夜長にぜひ挑戦してみてください。

読書の窓 着物



11月15日は「きもの日」です。1964年の東京オリンピックの際、東京を訪れた外国から来た方々は「日本人は着物を着ていると思っていたのに、だれも着物を着ていない！」と驚いたそうです。そんな外国人の姿を見た全日本きもの振興会の方が着物の普及と振興を目的として、「きもの日」を制定しました。この日を中心に「七五三詣り」など、着物に因んだ企画や行事が全国各地で展開されます。

7年後の東京オリンピックに向けて、外国の方に日本文化の着物を自慢できるくらい詳しくなりませんか？

『歌舞伎のびっくり満喫図鑑』

君野倫子著 小学館

歌舞伎に登場する着物は私たちが普段見ているような綺麗な着物ばかりではありません。蛸や耳の模様の着物など少し風変わりな物もあります。この本では着物だけでなく、歌舞伎で使用されるかつらや小道具を写真入りで紹介しています。役柄や場面によって変わる着物・小道具に詳しくなれる一冊です。

『夜光虫』

森繁久彌/著 新潮社

売れっ子役者である三上はある日、すたれたクラブでどこかぎこちなく座る女、スミコと出会います。彼女へのプレゼントは何がいいだろうかと考えた末、三上が買い求めたのが着物でした。桐の箱に入った紬を抱え、スミコとの待ち合わせ場所へと急ぐ三上。彼らの恋の行方は一体どんな結末を迎えるのでしょうか。

『着物のえほん』

高野紀子/著 あすなろ書房

お祝いの席にふさわしい着物、七五三の祝い着に飾る小物など、着物の伝統色や柄、歴史、正しい着方などを可愛いくまのおばあちゃんが紹介してくれます。着物を着た時の歩き方や気をつけたいことも教えてくれるので、ただ着物を着るだけではなく、作法も学ぶことができます。親子で楽しめる一冊です。

『自由にいこう！男着物』

鴨志田直樹/著 河出書房新社

「着物を着るなら、人の目を気にするな」、「着物で旅行が楽しい」など普段着として着物を着ている著者ならではの目線で書かれた男着物の可能性を広げてくれる一冊です。着付けや帯の結び方も載っているので、着物初心者の方も楽しめる一冊です。ぜひ手にとって着物を着てみてください。

『京の色事典330』

藤井健三/監修 平凡社

平安時代は着物の色と身分が密接に結びついていた時代でした。例えば「墨染」は僧侶、「深紫」は最上位の帝が着るものと決まっていました。また「かさねの色目」といって重ねた着物の色のグラデーションでおしゃれを楽しんでいました。色の名前からその時代の風俗を知ることもでき、面白いですよ。

☆読書の窓☆

『超訳百人一首 うた恋い。』

杉田圭作 メディアファクトリー

百人一首とその歌人という古い感じがして、敬遠しがちではありませんか？このまんがは歌人たちの失敗談や普段の生活を交えて歌を紹介します。紫式部や小野小町などなんとなくスゴイ人と思う人びとも実は仕事に恋に悩んでいたことを知り、彼らに親近感を覚えさせてくれるまんがです。（大塚）

